

地域通貨 市民のかけ橋

商店街復興 地域に助け合い

地域でモノやサービスを循環させるため、地域通貨を活用する取り組みが広がっている。東日本大震災の経済復興の一助にと、被災地でも流通が始まった。県内ではどのように使われているのか。現場を歩いた。

学生と交流生む

川崎「たま」

川崎市多摩区、小田急向ヶ丘遊園駅そばのカフェ「ルグラン」。マスターの信元秀治さん(64)は、常連の学生客が作ってくれたという真新しい写真入りのメニューを見せられた。「これも「たま」のおかげです。ありがたい」

引など年間10万〜20万たまが流通している。

ルグランの顧客の7割は、近くにある明治大や専修大の学生だ。信元さんは、「たま」を年の離れた学生たちのニーズを聞き出すきっかけにしてきた。レシで「たま」を渡された時、「何をしてもらったんですか?」と話しかける。

「無言で代金を受け取るだけじゃなく会話のきっかけになる」

そんな交流の中で、今春明大を卒業した吉田有希さん(22)ら4人が1月、メニューを作ってくれた。料理の写真を入れ、見やすいデ



ザイン。「自分ではこま

で上手につくれない。外注したら相当なお金がかかる」と信元さん。ありったけの「たま」を4人に支払った。吉田さんは、もらった「たま」を、地元アーティストの造形教室の参加費600円のうち100円分に使い、友人の引越しを手伝ってくれたお礼に100

新住民らつながり

相模原「萬」

山梨県境にある相模原市緑区藤野地区では通帳型の地域通貨「萬(よろこ)」(44)らが中心となって20

0円分を渡した。信元さんは6月、店に地元のアマチュア落語家を招いて寄席を催す。もちろん出演料は「たま」で払う予定だ。

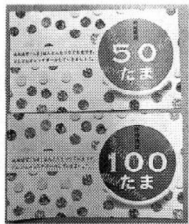
09年に始めた。相手にしてあげたことは「十」、してもらったことは「二」と通帳に書き込む。年会費は1千円。「体調が悪いので食事を作って」「畑仕事を手伝って」と要望を出すと、できる人が手を挙げる。いくら支払うかは相手との対話の中で決まる。「マイナスが多くなっても気にする必要はありません。取引を通じて、つながりという価値を生み出しているの」と池辺さん。

約180世帯の会員の約半分は、ここ5年ほどの間に移住してきた人たち。電器メーカー社員、整体師、主婦、農家……様々な立場の人が頻りにイベントを催し、つながりを強める。

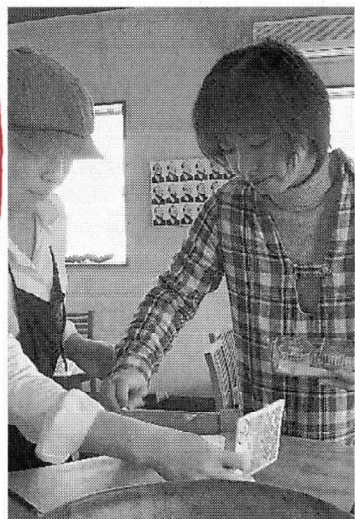
池辺さんは「もっと地元にも長く住む農家も巻き込み自分自足ができるようになれば」と話す。(鹿野野男)

地域通貨

ドイツの作家ミヒャエル・エンデが提唱し、欧米では1980年代から広まった。使い道が限られ、自治体や市民、市民団体が発行する。日本では10年ほど前から各地で取り組みが始まっている。



「たま」で作ってもらったメニューを手にする信元さん(川崎市多摩区)



ケーキの代金の一部を「萬」で払い、通帳に記入してもらう客(相模原市緑区)

界者

則政

道し

りの包装フィルムが「おかし」